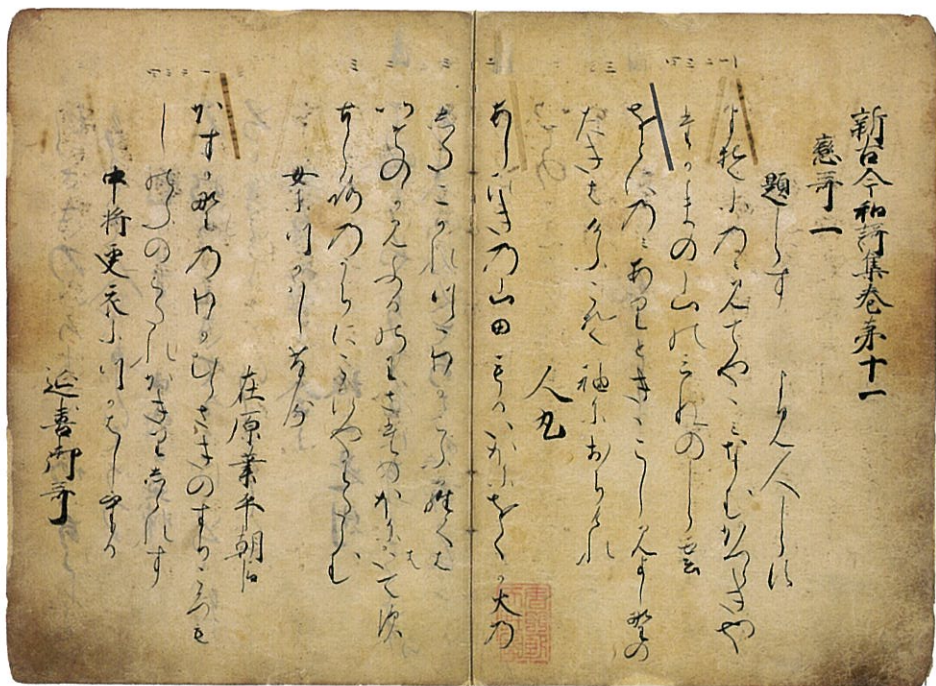


# やまとの名品 天理図書館

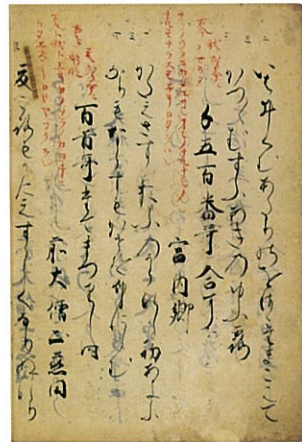


しん こ きん わ か しゅう からすまるほん  
**新古今和歌集 烏丸本** (重要文化財)

南北朝初期写 20巻 2冊  
 縦23.5cm 横16.0cm

『新古今和歌集』は二十一回編纂された勅撰和歌集の一つ。勅撰和歌集とは、天皇や院（上皇）の命によって作られた歌集のことで、始まりは、延喜五年（九〇五）に編まれた『古今和歌集』に遡る。その序文には「やまとうたは人のこころをたねとして、よろづのここの葉とぞなれりける」と、当時の主流であった「からうた（漢詩）」に対して「やまとうた（和歌）」の確立を高らかに宣言する。以来、長く続く勅撰和歌集の内でも、『新古今和歌集』までの八つの歌集は特に「八代集」と称され、和歌として日本語による文学表現のお手本とされた。

『新古今和歌集』は、後鳥羽院が、源通具・藤原有家・同定家・同家隆・同雅経・寂連の六名に撰集を命じ、元久二年（一二〇五）に一応の成立をみる。しかし、それ以降も長きにわたり、撰者達による歌の切継（削除や入集）が続けられ、更に、承久の乱（一二二一）に敗れて隠岐の島に追放された後鳥羽院もまた、彼地において切継を続けた。そのため『新古今和歌集』には多くの異本が派生することとなった。掲載本は、南北朝初期に書き写されたもので重要文化財。所々に朱・墨で注が記されている



る。また歌頭に貼付された色紙の切紙は、まさに後鳥羽院の隠岐の島における切継、すなわち和歌取捨の実際を示すしるしとも言われている。

江戸中期の烏丸光栄（公卿・歌人）が所持していたことから、烏丸本の名で呼ばれる。

※『新古今和歌集烏丸本』は、本館の館内パソコンでの、デジタルカラー画像による閲覧が可能です。

（天理図書館 岡本千佳）